

## キリスト道講演会

## 試練の中での希望（二）

2011年7月11日（東京 新宿）  
奥田 昌道

命懸けの世界 イエス・キリストを通して旧約を見る 聖書の終末観 今にも世の終りが来る  
死を突破して向こうの世界で輝くという希望 試練という炉を通して純化されていく 心を込め  
て愛し合いなさい 原則と例外のひっくり返り 世の終わりと新天地 エルサレム滅亡と世の  
終わり キリストの再臨 新天地がやってくる前触れ 信仰のあるなしとは無関係 本当の共  
同的連帯感 パウロの遭遇した苦難 苦難をも誇りとする パウロの終末観 自然界の呻き 滅  
びへの隷属から解放されて回復された姿 向こうに輝く世界があるという希望 懐深く幅広く清  
濁合わせ飲む福音 キリストの愛の勝利 十字架の捨身の愛 キリストがすべて 試練をひたす  
ら喜びとせよ 祈り

## ●命懸けの世界

講演会にお集りの方が少ないですが、いろんなご事情があるのでしようけれども、聖書とか神の国とか、そういうことに対する真剣さという点で、やはりまだゆとりがあまりないでしょうね。これは命懸けの世界だと私は思っています。

今日、用意したのは、もっぱら聖書の中から、この「試練の中での希望」にふさわしい箇所をずっと拾い上げました。私の個人の見解というのはほとんどここには書いておりません。コメントで申し上げるかもしれませんが、取り上げているのは全部、聖書の言葉です。聖書の言葉というものに対しては、皆さんそれぞれがそれに真剣にぶつかって、自分はそのれに対してどう応答するのかという、いわば問いかけがされているのだと思います。

もちろん、聖書の言葉は多彩ですから、常にその全てについて自分たちのハートに響くということはないと思う。けれども、今日の拾い上げました言葉というものは——こないだの東北の大震災、それから原発事故といった、本当に危機的な状況ですね。しかも、単に個人がどうこうということではなくて、もう国家的な危機です——そういう危機の中で私たちが生きていく指針を求めるのに、聖書は一体この世というものを、この世界というものを、歴史というものをどのように観ているのかと。そういう気持ちでずっと拾い上げてみたのが今日のプリントなんです。

これは、「何章何節」とだけ書いたら半頁で終わります。けれども、私はあえて全部自分でパソコンで打ちました。自分で打ちながら、なにか自分の身体の中へ染み込ませているという——もちろん筆写すればもつといいのかもしれませんが——やはりパソコンで打つときでも一々間違いがないか確かめながらやっていますので、そうすると非常に、思わぬ発見というか、



「はあ、こういうことが書かれているんだ」

と、なにかググッと迫ってくるのを感じるんですよ。サーッと読み流すのではなくて、一つ一つ打ち込んでいきますと、「はあ、そうか」という、新しい発見をするような気持ちがあったしました。

それともう一つは、あとへ残したいという気持ちがある。「何章何節」と箇所だけを書いたつて、なかなか日頃、いちいちそこを——一か所や二か所なら開きますけれども、ズラズラと並んでおれば字引と一緒にです——そう簡単に開かない。こういうプリントになりますと、本当にこれを座右に置いていただいて、そして束ねていただくと、それ自身が小聖書といいますが、現代における私たちに必要な神の語りかけの言葉集という意味合いを持つのではないかと思って、私はこういうものをこれからも作っていいかなと思っています。

### ●イエス・キリストを通して旧約を見る

では、文章を読みながら、皆さんと味わっていきましょう。

《聖書（今回は、新約聖書）は、艱難、苦難、試練に対して、私たちに、どのように語りかけているだろうか。

聖書における語りかけは、その時代、その社会の状況の中で語られているから、そのような背景、状況による制約を免れない。》

これは特に旧約聖書をお読みになるときに、これを抜きにして、それを直ちに

「現代の我々に直接語られている」

とかいうふうにもっていくのは無理があると思います。具体的状況の中で、しかもユダヤ民族という、特別に神さまに選ばれた民ですけれども、いろいろ問題の多い民、それに対して語られている。語られる神さまの名前も、

「エホバ曰く……」

ということ、「エホバ」という名前と呼ばれています。それを我々がどう受けとっていくか、これはそれ自体が問題なんです。

私はいつも、旧約聖書に向かうときは、イエス・キリストを通して旧約を見るという見方をしています。つまり、キリスト自身が旧約をアウフヘーベンというか、変革しておられる。しかも、プラスにポジティブに旧約を活かしておられる。そうではなくて、旧約をそのまま適用しようとしたのがパリサイ人とか当時の律法学者たちです。そういうやり方をしますと、生命がなくなりました。死にました。パウロも、

「律法が来て、私は死んだ。律法は本来、人を活かすものであるのに、その律

法に縛られて自分は命が無くなった」

と言っている。ガラテヤ書では、

「キリストは、律法の呪いから我々を解放してくださいました」



と、そこまで言い切っています。それを本当に実践されたのがキリストなんです。だから、キリストは憎まれた。誰にか。ユダヤ人にです。学者、パリサイ人<sup>びと</sup>、宗教家、そういったオーソドックスな方々からキリストは憎まれ、殺されたわけです。

私たちは、キリストがこの旧約聖書というものをどんなふうにお受けとりになっているのか。そこから何を汲み取って、何を活かそうとなさっているかという角度を持たないと、

「旧約も新約も等価値である。神の言葉であるから」

なんていう、そんな形式的な論法ではとても通用しない、それだけに読み方は難しいと、私は思っています。それがここにあります、

《「その時代、その社会の状況の中で語られている」ということ。そういう背景

とか状況が変われば、神の語りかけもまた変わっていたはずです。そういった制

約があるということを絶対、無視してはいけません。それゆえ、その語りかけを、

そのまま直ちに現代の私たちに適用することは適切とは言えない。それにもか

かわらず、なお、聖書に流れている世界観（特に終末観）

聖書を貫いている世界観と言ってもいい。世界をどう観<sup>み</sup>ているか、歴史をどう観<sup>み</sup>ているか。

これは特に「終末観」と言うべきだと思います。

は私たちに示唆するところは大きいと言わねばならない。》

そのように私は思っています。そこで、まず第一の主題として、「聖書の終末観」ということを取り上げました。

## ●聖書の終末観

### 《Ⅰ 聖書の世界観（終末観）

聖書は、この世界（地上界）がそのまま天国的な理想社会（神の国）に転化すると

は見えていない。》

共産主義というのは、

「地上に理想社会を作る」

と言っていた。ところが、いまだかつてそれが実現したためしがありません。しかも、それを標榜する人たちが権力を握ると、どんなに酷い<sup>ひど</sup>状況になるかというのはいまの歴史が証明するところです。ということは、思想はありましても、人間自身は変革されない。人間エゴというものの、支配欲というものの、それに全く触れませんから。野放しのそういう人間性をそのまま認めたら、ああいった現実には、そういった国の諸国に見られるようなのが実相なんです。ですから、そういった理想社会、これは共産主義の人たちが唱えましたけれども、それはだめでした。

では、聖書はどうなんだと。地上界がそのまま天国的な理想社会、神の国に転化するとは見ておりません。「必ず終りがくる」と言っている。非常に悲観的なんです。人々は喜び



ませんよ、

「もう、終りがくる。この地球は滅びる。天体が焼け崩れる」

なんてことまで書かれていますから。

「今の世界が全部滅びきって、それから新しい天地がやってくる」

と、黙示録も言っている。ですから、この世の人たちから見たら、あまりにも面白くない、不愉快な思いをさせる。

「あなたは死にますよ。あなたはもう終りがきますよ」

と言われているのと同じなんです。

世界の終りがくると聖書は言っている。でも、考えてみたら、我々の人生も必ず終りがくる。この見える我々ですね。終りのこない人間というのは未だかつていないんです。しかし、

「いや、いましたよ」

「誰ですか」

「はい、エリヤです」

と。エリヤは火の車に乗って天へ上っていきました。それから、

「エノクは見えずなりき」

と、あれはそのままスツと神の国に、天国へ迎え入れられてしまった。エノクとか、エリヤとか、そういう例外的な人はいらつしやつたでしょうけれども、一般的にいいますと——コリント書かな、どこかにあります——

「人間にとって定まっていることは、人は必ず死ぬということ、死んだあとは

キリストの審きの座の前に現れるということ、この二つだけは動かしようが

ない」

と書いてあるんです。キリスト教でない人はどうなんでしょうか。閻魔さまのところへでも行くんでしょうか。そして、なにか舌を引っこ抜かれるとか、そういうことを聞きましてたけれども。

人は必ず死ぬ。これは人間に終りがくるということを言っています。だから、地球という、世界というものにも終りがくる。個人というものにも終りがくる。すべて人間は終りがくるということが決まっているんです。だから、一休さんですかね、

「正月は、冥土の旅の一里塚。めでたくもあり、めでたくもなし。」

と詠<sup>うた</sup>った。生まれた瞬間からもう死というものに向かつて歩んでいるんですから。

でも、そう悲観的なことを言いなさんなど。必ずピークがくるんです。赤ちゃんから育つていって、一番成長期でなにかもが充実しているときがくる。しかし、それは長くは続かない。青春というものは長くは続かない。やがて——やはり仕事があるんでしょうね——子孫を残すという仕事を終えたらだんだん衰えていく。人間もピークがあるけれども、ピークを過ぎれば必ず衰えていく。





## ●今にも世の終りが来る

そういうようにして、終末ということを前提にして語っている。この視点を逃したら、聖書は成り立たないんですよ。たとえば、パウロが、

「結婚するな」

というようなことを言う。なぜかというところ、

「もう今にも世の終りが来る。今にもキリストがおいでになる。キリストがおいでになるときに、その備えをしなければならぬときに、結婚だ何だといって、この世のことで振り回されておつたら、キリストが来られるときに困るではないか」

と。素晴らしい結婚ならいいんですよ。でも、結婚なんて昔は苦勞だったんでしょね、女性にとっては。だから、

「乙女よ、結婚なんかしない方がいい。でも、どうしても抑えきれなかったら構わないけれども」

というようなことを言ってます。あれを一般的に、

「パウロは結婚に対して悲観的である、否定的である」

とか、そう言っではいかん。

「今にも終りが来る。今にもキリストが、目の黒いうちに、キリストがおいでになる。

それに備える点からいうと、もう結婚はひかえて、それを待とうではないか」

という姿勢なんです。その点をはずして、「パウロの結婚観はこうなんだ」とは言えないわけです。まあ、ひとつの例ですけども。だから、ここに書きましたように、

《必ず終わりが来る（世の終わり、終末の到来）ことを告知し、それを目前に控えた

緊張の中で、現在を生きること、そのような生き方はいかに在るべきかを語る。》

こないだの大震災。私は、大震災だけだったら、まだ救いがあつたと思う。あとはまた復興していけばいいんですから。そういう震災に備えるような更に防御を、知恵を出し合つて考えたらいい。ところが、あの原発事故というのは数十年に影響が及ぶんでしょ。日々の報道ごとに深刻化していきますよね。それを察知しているのは欧米の方が速い。日本の方が遅い。欧米の方がその影響というものに対していち早く察知して、いろんなことを言ったりしているようです。日本は今まであまりにも——まあ、地震なんかいろいろありましたけれども——戦争だとか、そういうこともないし、いわゆる平和の中でずつと来ましたから、ちよつと平和ぼけをしていたように思います。それに対してあいつた大事故が起こり、原発の何ともいえない恐怖と言いましょか、正体のわからない何か、攻撃、迫ってくる危機、そういうものを前にしますと、私たちはやはり緊張せざるをえません。緊張感を持たざるをえません。そういう感じがいたします。

ですから、終末ということをはかえて、その緊張の中で現在を生きる、そういう生き方はいかにあるべきか。聖書の語りかけはそういった緊張の中から語っている。もう今にも

終りがくると。しかも、単なる終りではない。キリストがおいでくださる。キリストの再臨、キリストがおいでくださるという、それを前にして私たちはどうするかという角度で言われています。のんびんだらりと永久にこの地上が続いていくという、そういった中での倫理、道徳を語っているのではないということを、それをまず理解していただきたいと思います。

### ●死を突破して向こうの世界で輝くという希望

それで、具体的には私は、「ペテロの手紙」というのをここに引きました。ペテロの手紙の第一と第二、それから福音書のキリストの言葉、この三つを引きました。それをまず味わっていいと思います。これは全部、新共同訳を今度は採用しました。

《1 ペテロ第一の手紙から（第1章3〜9、13、20〜21節）

「<sup>3</sup>わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、<sup>4</sup>また、あなたがたのために天に蓄え<sup>たくわ</sup>られている、朽ちず、汚れず、しほまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。》

ここに、

「神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ」

とあります。これはなにも肉体的に再び生まれさせたというのではなくて、内的に、私たちの自然の生命体の中に新しい生命を与えてくださった、作り出してくださいました。それがキリストが復活されたという事実によって私たちにもたらされたということなんです。キリストが復活されたという、そのことが私たちに与ったのどんなに大きな希望であるかということをご自分で言うていただいています。即ち、キリストが復活されたということは、あなた方も復活の生命をいただいているということなんです。死んでも死なない生命をいただいている。だから、何がきても、明日、私たちにいわゆるこの地上の終り、あるいは肉体の終りがきても、それでも、このいただいた生命というものはびくともしない。死を突破して向こうの世界で輝くという、それが希望なんです。ですから、

「生き生きとした希望を与える」

という。生き生きとした希望というのは絶対、失望に終わらない希望なんです。単なる願望ではない、実現する希望、これを与えてくださったのは、ほかならぬイエス・キリストのご復活というその事実。それが私たちに与らした内的変化である。

しかも、天の宝を受け継ぐ。天国を受け継ぐというのは、天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しほまない財産を受け継ぐ。見えない宝なんです。「天に宝を積み」と、キリストは言われました。

「地上に宝を積むのではなくて、天に宝を積み」



ということを抑えましたけれども、天に何かものすごい素晴らしいものが貯金されているようですね。きつと、向こうへ行つたときにわかるんでしょう。今はわからないけれども、ま、そういうものを受け継ぐ者、つまり、天国の相続人です。キリストが向こうにいらつしやる。

「キリストと一緒に天国を受け継ぐ共同相続人である」

と、パウロは言います。そういったものが私たちの現世の希望であると言うんです。願望ではない。真の希望であると。

しかも、それは終りの時に素晴らしい栄光に包まれるという、そういった意味の完全な救いにあずかるために今、神の御力で守られていると言う。

「<sup>5</sup>あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によつて守られています。」

神の御力があなた方を守っている。「信仰によつて」というのは、それをいただくという、拒絶しないで、いただくというこちらの態度ですから、原動力は神の御力なんです。

「キリストが復活してくださつて、私たちを新たな希望、生命の中へと産み出して、具体的な希望を与え、そして、終わりの時まであなた方を守っている。だから、

もう絶対に大丈夫だよ」

という保証をここで宣言しているわけです。だから、

<sup>6</sup>それゆえ、あなたがたは、心から喜んでいるのです。」

と、こうなるわけです。喜ぶ原因もないのに、喜べと言つても無理ですね。これは喜ばざるをえないと。

もしも、3億円の宝くじとかジャンボ宝くじが当たったら、それを隠しても、なにかニコニコ、ニコニコという笑みがこぼれるのではないですか（笑）。あまりおおぴらに言つたら大騒ぎです。

「金貸して、金貸して、分けて」

と言ってくるから、絶対にそのことは隠しておかなければならないけれども、

「なにかあの人、昨日とちがうわ。なにか、うれしそうにしているね。何だろう」

と。それは宝をいただいたからです。

「私たちの宝は天に蓄えられた宝くじ以上の素晴らしい宝。これがあなた方に約束されている。それを本当に確信しているから、あなた方は喜ばざるをえないね、笑みがこぼれざるをえないね」

と、こう言っているんです。他人から見たら、

「あれは変なんじゃないの。なにかいつもニコニコ、ニコニコしていて、何が原因だろうか」

というくらいに、当時のこのペテロの手紙をいただいているクリスチャンたちはそういう現実を生きていたということです。あなた方は、だから、心から喜んでいるんです。し



かも、それはこの世的に見たら、さまざまな試練に見舞われている。さまざまな試練に——自然的な災害もありましょう、信仰ゆえの迫害もありましょう——そういういろんな試練に見舞われながら、いよいよ輝いているということなんです。

●試練という炉を通して純化されていく

「今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが、

<sup>7</sup>あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊くて、

あなた方の信仰は、その試練によつてうそかほんとかがわかると。本当のものか偽ものかは、試練という炉を通して試されると言う。金というものは、さまざまな精錬過程があつて、はじめて純金というものが生まれてくるそうです。不純なものから純化されていく。それと同じように、あなた方の信仰というものも本当に純化されていつているんだと。そして、

イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れとをもたらすのです。

と。しかもその次に、

<sup>8</sup>あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。<sup>9</sup>それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。」（ペテロ一・

3～9）

これはやはり私たち一人ひとりにあてはまることです。私たちが本当のクリスチヤンかどうかというテストはこのペテロの言葉です。》

「ああそうだ、その通りだ。ペテロさん、あなたはいいことを言ってくれているね。

二千年たつても変わらないよ」

と、そうやって答えられるか。あるいは、「全然、これは自分にはぴたりきません」と言うかです。皆さん、いかがですか。ここで、「あなた方は」と言われているのを、「自分は」と言つて受けとつて、

「ああ、そうです。はい、ペテロさん、うれしいね。早くここに現れてくださいよ」というような魂でいてください。

「<sup>13</sup>だから、いつでも心を引き締め、身を慎んで、イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。」（ペテロ一・13）

これはどんなことなのか。イエス・キリストが現れたもうときのこの恵みというものがどんなに素晴らしいものかというの、我々は想像もできません。夢見る人のようなことかもしれませんけれども。現実が暗ければ暗いほど、こういうすごい——ファンタジーとまでは言いませんよ、霊的事実なんですから——しかし、そういうものを夢見る人であつてくだいさいね、皆さん、夢見る人に。





「<sup>20</sup>キリストは、天地創造の前からあらかじめ知られていましたが、この終わりの時代に、あなたがたのために現れてくださいました。あなたの方のためにということです。」

<sup>21</sup>あなたがたは、キリストを死者の中から復活させて栄光をお与えになった神を、キリストによって信じています。キリストを基<sup>もと</sup>として信じていますと。

従って、あなたがたの信仰と希望とは神にかかっているのです。」（ペテロ一：20～21）

これがペテロ書です。

### ●心を込めて愛し合いなさい

それから、同じペテロ書の第4章では（第4章7～8、12～14節）、

「<sup>7</sup>万物の終わりが迫っています。だから、思慮深くふるまい、身を慎んで、よく祈りなさい。<sup>8</sup>何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです。」（ペテロ一4：7～8）

終わりが近い、もう命が終わりだということが分かったら、それまでの間に何をするか。徹底的にその人を愛することでしょうね。よく、ご夫婦のあいだでも、一方のかたがもう余命いくばくもないとか、お医者さんから、

「あと何か月ですよ、覚悟してください」

とか言われたときに、片一方では絶望感があるでしょう。けれども、絶望だけしていたのでは始まりません。

「そうか、あと六か月か。六か月間、本気でこの人のために尽くそう。この人を愛しぬこう。この人が喜ぶことをやりぬこう」

とか、きつとそういう思いにかられるのではないのでしょうか。で、それが診断の誤りだったということになったときに、どうなるか。損をしたというふうなことになるのか、その思いでやはり貫くのか。

「もうこれで二度とお会いできないですよ」

と言われたら、皆さん、固い握手をして別れを惜しむでしょ。いつ終わりがくるかもわからない、次お会いできるかわからないという、そういう気持ちでいつもお互いに接しますと、そこには本当に真実なものが流れるんです。愛で包まれる。我が儘<sup>わがまま</sup>は出てこない。ところが、のんびんだらりといつまでもいくと、ついつい我が儘<sup>わがまま</sup>が出、身勝手が出、ときには罵<sup>ののし</sup>り合ったり、ということではなからうかというふうに思いますが。

だから、ここに、

「<sup>8</sup>何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を、咎<sup>とが</sup>を覆<sup>おお</sup>って



しまう。」

と。人間関係でいうと、欠点を見なくなる、欠点を包んでしまおう。

### ●原則と例外のひっくり返し

それからその次に、

「<sup>12</sup>愛する人たち、あなたがたを試みるために身にふりかかる火のような試練を、何か思いがけないことが生じたかのように、驚き怪しんではなりません。」

これは私はやはり、あの震災のことを思いますときに、すべての人が――震災に遭った人も遭ってない人も――すべての人がこの御言葉に触れて、

「そうだ、いつ何があるかもわからない。どんなことが起こっても、驚きあわてないように日々、心しよう」

と、そういう気持ちでいてくださったらなあと思う。いや、今からでもそうあってほしい。まだこれから何が起こるかわからないんです、我々の身の上に。そのときに何はともあれ、

「何がきても自分は動じないものをいただこう。いや、神さまはくださっている。そのためキリストを差し出してください」

と。この神さまの顧みを神さまは無償で我々にくださっているんです、キリストという自分の宝物を我々のために。

それを全部さておいて、ただ人間的な知恵で何か備えをするだけでいいんだろうか。ましてや、そんなものはありえないと思つて、呑気に暮らしている。そして、何かがあると、またあたふたと慌てる。それではちよつと寂しいなという思いがいたします。やはり、人間というものは実に不安定であつて、いつ終りがくるかわからない。地上のもので永遠なるものはないという、その前提に立つて生活を築いていく。

「平穩無事なのが原則だ。ああいった事柄は例外なので、例外がきたときに考えた方がいいじゃないか」

というのではないように思うんです。つまり、原則と例外のひっくり返しです。

聖書は危険というものを前提にして、

「危険の中で守られていることに感謝しなさい。その危険が迫っている中で日々を平穩に活かしていただくことに感謝しなさい。お互いに愛し合いなさい」

という、そういった見方をしていますよ。ところが、人間というのは、

「平穩なのが当たり前なんだ。それでない事態がきたら神さまを恨んでやろう」

とか、「誰の責任だ」とか言つて責任追及するとか、なにかそういうふうには、神さまの側からの見方と人間を基準とした見方が違っているように思うんです、原則と例外が。私は、人間的な思いは片方に置いて、やはり、

「神さまは聖書を通してどんなふうに仰っているか」



ということには真実に向き合つてほしい。向き合つたうえで、「にもかかわらず、私はこうする」と言うなら、いいんですけれども。

「知らなかった。聖書がこんなことを言っているのは知らなかった。誰も教えてくれなかった」

という、それでは私は悔しいんですね。

では、誰が教えてくれるのか。私は、先生方だと思う。学校の先生方、幼稚園の先生方、そういった方々が本気で聖書を読んで、そして、自分でそれにどう対処するかということを決めて、そして、そういう角度から生徒たち、園児たちに対していく。そうすると、おのずとものの見方が変わってくるのではないかと思う。

なにも、特定の宗教を信じなさいとは、私は言いたくはありません。けれども、非常に現代世界というのは不安定である、人間も不安定である。そういう不安定の中で日々生かされているという、そういうものの見方を教えてくれるのは、やはり聖書ではないかと思います。だから、こういう講演会もやっているわけです。でも、なかなか来てくださらない。本当に私は残念な思いがいたします。

「<sup>12</sup>愛する人たち、あなたがたを試みるために身にふりかかる火のような試練を、何か思いがけないことが生じたかのように、驚き怪しんではなりません。

<sup>13</sup>むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど喜びなさい。

これは特に迫害なんかのことでしょう。

それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びに満ちあふれるためです。<sup>14</sup>

あなたがたはキリストの名のために非難されるなら、幸いです。栄光の霊、すなわち神の霊が、あなたがたの上にとどまってくださるからです。」（ペテロ

ー4・12〜14）

これは宗教的迫害のことを指していると思います。

## ●世の終わりと新天新地

それでは次に、ペテロの第二の手紙の第3章の3節から13節を引きました。キリストが世の終わりを預言された。ところが、ちつとも世の終わりが来ない。キリストが再臨されると仰つたのに、ちつとも来ない。あれは嘘だったのかと。

そういうことに対しての答えです。

《2 ペテロの第二の手紙から（第3章3〜13、20〜21節）

「<sup>3</sup>……終わりの時には、欲望の赴くままに生活してあざける者たちが現れ、

あざけつて、<sup>4</sup>こう言います。『主が来るといふ約束は、いったいどうなったのだ。父たちが死んでこのかた、世の中のこととは、天地創造の初めから何一つ変わらないではないか。』<sup>5</sup>彼らがそのように言うのは、次のことを認めよ





うとしないからです。すなわち、天は大昔から存在し、地は神の言葉によって水を元として、また水によってできたのですが、<sup>6</sup>当時の世界は、その水によって洪水に押し流されて滅んでしまいました。

これはノアの洪水のことを指しています。

<sup>7</sup>しかし、現在の天と地とは、火で滅ぼされるために、同じ御言葉によって取っておかれ、不信心な者たちが裁かれて滅ぼされる日まで、そのままにしておかれるのです。

昔は、水で一端滅びた。今度は、火で焼かれると、そういったことをここで預言している。

<sup>8</sup>愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。

千年だ、一日だと、人間の計算では長かったり短かったりしますが、神さまにおいては千年も一日も変わらないんだと。そういうことですね。一日は千年のごとく、千年は一日のごとしと。

<sup>9</sup>ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。

皆がこつちを向いてくれるように、ということですよ。「悔い改め」というのは方向転換すること。今まで神さまに背中を向けていたのを、クルッと向き直って、神の方を向いてくれるようにと。

<sup>10</sup>主の日は盗人ぬすびとのようにやって来ます。その日、天は激しい音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは暴かれてしまいます。<sup>11</sup>このように、すべてのものは滅び去るのですから、あなたがたは聖なる信心深い生活を送らなければなりません。<sup>12</sup>神の日の来るのを待ち望み、また、それが来るのを早めるようにすべきです。その日、天は焼け崩れ、自然界の諸要素は燃え尽き、熔け去ることでしょう。<sup>13</sup>しかしわたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。」（ペテロ二3:3〜13）

私には正直、わかりません。この地球がいつか本当に無くなってしまうのかどうか、そんなことは私はさっぱりわかりません。昔の人はこんなふうに言った。でも、それがいつのことなのか。本当にそうなるのか。それとも、地球は永遠に地球として存在し続けるのか。それは私の小っぱな頭ではとうてい判断できません。けれども、昔の人たちは、使徒たちはこんなふうに考えた。それも根拠なくしてではない。キリスト自身がそういうことを仰ったものですから。



## ●エルサレム滅亡と世の終わり

それを次に、「イエス・キリストの言葉から」というので引用しました。ここで引用しているのは二つのことが言われている。エルサレムの滅亡ということが一つ。それから、世の終わりということ。この二つが言われている。それが、どの部分がどの部分であるかというのがなかなか区別しにくい点もありますけれども、その二つのことを仰った。ペテロが、

「天体が焼け崩れる」

なんて言っているのは、エルサレムではなくて、この世全体、地球全体についてのキリストの預言を引いているのだと思います。

プリントを讀んでいきましょう。

《3 福音書のイエス・キリストの言葉から（マルコによる福音書第13章「参照 マタイ福音書第24章、ルカ福音書第21章5〜36節」）

「イエスが神殿の境内を出て行かれるとき、弟子の一人が言った。『先生、御覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう。』<sup>2</sup> イエスは言われた。『これらの大きな建物を見ているのか。一つの石もここで崩さず、れずに他の石の上に残ることはない。』

木っ端みじんに粉碎されて跡形もなく無くなるよ、ということと言われた。

<sup>3</sup> イエスがオリブ山で神殿の方を向いて座っておられると、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかに尋ねた。<sup>4</sup> 『おっしゃってください。そのことはいつ起こるのですか。また、そのことがすべて実現するときには、どんな徴があるのですか。』<sup>5</sup> イエスは話し始められた。『人に惑わされないように気をつけなさい。<sup>6</sup> わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。』

「自分が救世主だ、自分がキリストだ」と言う偽<sup>にせ</sup>キリストがいつぱい現れてくる、変な宗教家が出てくるということをまず言われた。

<sup>7</sup> 戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞いても、慌<sup>あわ</sup>ててはいけない。

戦争は絶えないですね、いまだに。

そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。<sup>8</sup> 民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、飢饉が起こる。これらは産みの苦しみの始まりである。

このあたりは現代に当てはまっていますけれども。それから次は、迫害のことが書かれています。

<sup>9</sup> あなたがたは自分のことに気をつけていなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で打ちたたかれる。

これは信仰のゆえの迫害です。



また、わたしのために総督や王の前に立たされて、証しをすることになる。<sup>10</sup>しかし、まず、福音があらゆる民に宣べ伝えられねばならない。<sup>11</sup>引き渡され、連れて行かれるとき、何を言おうかと取り越し苦勞をしてはならない。そのときには、教えられることを話せばよい。

上から教えられることを話せばいい。

実は、話すのは、あなたがたではなく、聖霊なのだ。

聖霊がそういうときにどう答えるかをちゃんと教えてくださるから、あらかじめ心配しなくともいいと仰った。

<sup>12</sup>兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。』（マルコ13・1～13）

それから次は、エルサレムの滅亡のことを言っておられます。

「<sup>14</sup>憎むべき破壊者が立つてはならない所に立つのを見たら——読者は悟れ——、そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。<sup>15</sup>屋上にいる者は下に降りてはならない。家にある物を何か取り出そうとして中に入ってはならない。<sup>16</sup>畑にいる者は、上着を取りに帰ってはならない。<sup>17</sup>それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。<sup>18</sup>このことが冬に起こらないように、祈りなさい。<sup>19</sup>それらの日には、神が天地を造られた創造の初めから今までなく、今後も決していないほどの苦難が来るからである。<sup>20</sup>主がその期間を縮めてくださらなければ、だれ一人救われない。しかし、主は御自分のものとして選んだ人たちのために、その期間を縮めてくださったのである。<sup>21</sup>そのとき、『見よ、ここにメシヤがいる』『見よ、あそこだ』と言う者がいても、信じてはならない。<sup>22</sup>偽メシヤや偽預言者が現れて、しるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちを惑わそうとするからである。<sup>23</sup>だから、あなたがたは氣をつけていなさい。一切の事を前もって言うておく。』（マルコ13・14～23）

これは私は、エルサレムの滅亡を預言されたのだろうと思います。現に紀元70年にエルサレムは滅びた。

「屋上にいる者は下におりてはいかん。家にあるものを取り出そうとして中に入ってはいいかん」

なんて、津波の時に家の中に入って捜しものをやっているうちに波が押し寄せてくるという、

「逃げる時には一目散に逃げろ、命あつてのものだねだよ」

という、なにかそういうふうなことを連想してしまいましたが、こういう非常に不幸なエルサレムの滅亡、それは容赦なく異民族に滅ぼされるわけです。そういうことが不意に起こ





らないように、そういったことを預言された。これはエルサレムのことですからいいとして、その次の段落です。

### ●キリストの再臨

ここからは、先程のペテロが言っています、「天体が焼き崩れ」という、あれにつながる預言だと思います。

「<sup>24</sup>それらの日には、このような苦難の後、太陽は暗くなり、月は光を放たず、<sup>25</sup>星は空から落ち、天体は揺り動かされる。<sup>26</sup>そのとき、人の子が

「人の子」というのはご自分のこと。

大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見ると。<sup>27</sup>そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。」（マルコ13・24～27）

ここでキリストの再臨、来臨ということが言われている。これは使徒行伝のところでも、イエスが天に昇っていかれる時のさまが使徒行伝1章のところに出てきます。そのころをちよつと見ますと、イエスが復活されてから四十日間しばしば弟子たちに現れたということが書いてあります。そして、

「エルサレムから離れないで父の約束、即ち、聖霊が臨んでくださる、その聖霊のバプテスマを受けるその日まで待ちなさい」

ということが言われる。

「イスラエルを回復してくださるのはこの時なんですか」

と聞きますと、

「いやいや、その時とかいうことは自分にはわからない。ただ聖霊が臨んでくださったら、あなた方は力を受けて神の国の証人となる、私の証人となる」

ということを言われて、その次に、

「<sup>9</sup>此等のことを言い終りて、彼らの見るがうちに挙げられ給う。雲これを受けて見えざらしめたり。

雲に包まれながら天に昇っていかれたということが書かれている。

<sup>10</sup>その昇りゆき給うとき、彼ら天に目を注ぎいたりしに、視よ、白き衣を著たる二人の人かたわらに立ちて言う、<sup>11</sup>『ガリラヤの人々よ、何ゆえ天を仰ぎて立つか、汝らを離れて天に挙げられ給いし此のイエスは、汝らが天に昇りゆくを見たる如く復きたり給わん』」（使徒行伝1・9～11）

「あなたが天に昇りゆくを見た、そのさまでまた来てくださる。天に昇つていかれて、また降つていらつしやるよ」

ということを御使たちが言ったということがここに書かれています。だから、それとこの



「人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来る」  
というのが呼応しています。

それから、前にここでもお話したと思いますが、ベティ・バックスターという少女が癒された時のことですが、キリストが現れてベティちゃんが癒されたあと、別れ際に、

「今度また自分が来る時、その時はもうあなたをこの地上に置いておかない。一緒に連れていくよ」

ということをやった。その時に、

「じつと天を仰いで見てなさい。雲に乗って私がまたやって来る」

というようなことを仰っているんです。ですから、なにかこの

「キリストが再び来てくださる」

ということをやはり絶えず繰り返し言われているようなんですね。

しかし、それがいつなのかとか、どういうふうにしてとか、その時天体が本当に焼けくずれて無くなるのかとか、そんなことは私のちっぽけな理性ではさっぱりわかりません。ただ大事なことは――私は自分に言い聞かせているんです――私たちがこの地上を去ります時、そのあと直ちにキリストに相まみえる。しばらく墓の中で寝ているなんて、そんなことは絶対いやです。

### ●新天新地がやってくる前触れ

この身体の中に聖霊が宿ってくださっているでしょ。この聖霊さまが私の霊と一緒に、ちようどせみが脱け殻を地に残して飛び立っていくように、聖霊と私の霊が一緒になって直ちにキリストのいらつしやる天界に迎えられる。そして、そこでキリストにお会いする。その時どんな霊体を賜るのか、そんなことは知りませんが、天界でキリストにお会いするのは、もう直ちにだと思っています。それだけははつきりしている。それ以外なおキリストの再臨といわれていることがどういう形であるのかないのか、それは私にはわかりません。

「わからないとは、なんと不信仰なことをあんたは言うのか。聖書を信じないのか」  
「わかりませんと言っている。わからないことを無理に信じ抜けと言ったって無理ですよ。私は、わかることはわかると言うし、わからんことはわからんと言う。でも、神さまを否定はしません。私はもうキリストにすぐにお会いできると言う、その希望に燃えています。現にそういうことを経験した人が何人もいらつしやるんだから」

と。そう言いたいんですね。それから、次のところへ行きましょう。

「<sup>28</sup> いちじくの木から教えを学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が伸びると、  
夏の近づいたことがわかる。<sup>29</sup> それと同じように、あなたがたは、これらのこ



とが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。  
キリストの再臨に近いということを悟りなさいと。

<sup>30</sup>はつきり言っておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。<sup>31</sup>天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」（マルコ13・28～31）

「これらのことが」というのは、

「<sup>8</sup>民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、飢饉が起こる。これらは産みの苦しみの始まりである」

という事態。マタイ伝の別のところでは、

「終りの時には人々の中から愛が冷えていく」

という、不法がはびこり愛が冷えるということが書かれています。つまり、

「もう世の終りだ、世も末だ」

という、そういう悲惨な嘆かわしい事態が起こると、新天新地がやってくる前触れだよと、そういうふうを受けとりたいと思う。

「<sup>32</sup>その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存知である。<sup>33</sup>気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたにはわからないからである。<sup>34</sup>それは、ちょうど、家を後に旅に出る人が、僕（しもべ）たちに仕事を割り当てる責任を持たせ、門番には目を覚ましているようにと、言いつけておくようなものだ。<sup>35</sup>だから、目を覚ましていなさい。いつ家の主人が帰ってくるのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、あなたがたにはわからないからである。<sup>36</sup>主人が突然帰ってきて来て、あなたがたが眠っているのを見つけるかもしれない。<sup>37</sup>あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい。」（マルコ13・32～37）

キリストの来臨、あるいは世の終りというのがいつどんな形で現れてくるかわからない。だから、常に緊張感の中で日々を過ごさなさいという、そういうことを言っているんですね。伸びきったゴムのようにあつてはならない。

「常に生き生きとした命にあふれた、そういう生き方をしていなさい。祈り心をもつも持ち続けていなさい。いつも天を見ていなさい。天に目を注いでいなさい。地の宝ではなくて、天の宝に、キリスト、神の国、そういうものに目を注いで、地のものに囚われてはいけない。地のものに囚われていると眠ってしまうから」という、そういうことを仰っているんだろうと思います。

### ●信仰のあるなしとは無関係

新約聖書に表れた世界観、終末観ということをずっと今たどってきました。今度は、現





実に使徒たちはどんな生き方をしたか、それを次のところで見ます。

## 《Ⅱ 艱難、試練の中での希望、勝利》

これの方が私たちには現実的です。ずっと我々には近い。まず、使徒パウロの場合はどうだったか。このパウロはいいお手本ですよ。私は、パウロほどのあんな信仰の篤い人<sup>あつ</sup>で、キリストからじかに召されて、キリストがいつもくっついていらっしやるから、どんな苦難もへっちゃらで、苦難も近づかないくらいに守られるんだろうと思つたら、全然違うんですね。全然違いますよ。

「なんでパウロにこんなことがいくつも起こるの？ キリストはどうなっているの？ キリストは守ってくださらないの？」

と、むしろ言いたいくらいの現実ですよ。ということは、我々にいろんなことが起こっても、「あなたは不信仰だから。あなたの祈りが足らんから、そんなことが起こったんだ」なんて絶対に言ってはならない。そんなことには無関係なんです。信仰があるなしとか、祈りの深い浅いとは無関係にいろんなことが起こってくる。しかし、

「何が起こってきても大丈夫だ」

という、これをいただくということ。それをパウロは訴えている。そんなふうを受けとっていたのだと思います。

### 1 使徒パウロの場合

使徒パウロは、艱難、苦難、試練に対しても、決して屈することなく神・キリストの力、聖霊の力によつて乗り越えていった。パウロの直面した艱難、苦難は、多くはキリストを信じるが故のそれであつたが、そのほかにも、さまざまの苦難を経験している。パウロのように天界のキリストから直接に使徒として召され、使命を賜った「聖霊の器」でさえも、あれほどの艱難、辛苦に遭遇し、耐えなければならなかつたことは、逆に私たちを勇気づける。艱難、苦難、試練に遭遇することは、決して、その人の信仰の有無、信仰の強さ・弱さ、深さの如何とは関わりがないことがわかるからである（そこには、人の側からは測り知り得ない深い神の御旨があることを信じて、安んじて主キリストのみ手に委ねればよいからである）。》

これが私の考えです。

## ●本当の共同的連帯感

《（Ⅰ）コリント人への第二の手紙から（第1章3～11節）》

「<sup>3</sup>わたしたちの主イエス・キリストの父である神、慈愛に満ちた父、慰めを豊かに下さる神がほめたたえられますように。<sup>4</sup>神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださるので、わたしたちも神からいただくこの慰めによつて、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。」



即ち、パウロほどの器でも、あれだけの苦難にあっている。そして、その苦難の中ではかならず神さまからの慰めをいただいて、それでまず立ち上がっている。それを体験しているから、今度は、同じような苦しみにあっている人のところへ駆け寄っていった、

「大丈夫だよ。私も味わったよ。私もこんな苦しみに耐えたよ」

ということが言える。それが、パウロは信仰が強いから一切の苦難の前に、防波堤になって神さまが守ってくださっていたら、苦しんでいる人たちのところへ行けないですよ。

「あんたの信仰が足らんからですよ」

と、きつとそう言っちゃいますね。そうじゃなくて、パウロほどの人でもあれだけの苦難を負った。ときには、

「もう死を覚悟した」

と言ってます。だからこそ、いろんな苦勞をしている人たちのところへ駆け寄って行つて、  
「大丈夫だよ、大丈夫だよ」

<sup>5</sup>キリストの苦しみが満ちあふれてわたしたちにも及んでいるのと同じように、わたしたちの受ける慰めもキリストによって満ちあふれているからです。

<sup>6</sup>わたしたちが悩み苦しむとき、それはあなたがたの慰めと救いになります。

また、わたしたちが慰められるとき、それはあなたがたの慰めになり、あなたがたがわたしたちの苦しみと同じ苦しみに耐えることができるのです。

いわゆる連帯感ですね。本当の共同的、連帯的な気持ち、これが生まれてくる。

<sup>7</sup>あなたがたについてわたしたちが抱いている希望は揺るぎません。なぜなら、あなたがたが苦しみを共にしてくれているように、慰めをも共にしていると、わたしたちは知っているからです。

<sup>8</sup>兄弟たち、アジア州でわたしたちが被った苦難について、ぜひ知ってほしい。わたしたちは耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失ってしまいました。<sup>9</sup>わたしたちとしては死の宣告を受けた思いでした。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました。<sup>10</sup>神は、これほど大きな死の危険からわたしたちを救ってくださったし、また救ってくださることでしょう。これから救ってくださるにちがいないと、わたしたちは神に希望をかけています。<sup>11</sup>あなたがたも祈りで援助してください。そうすれば、多くの人のお陰でわたしたちに与えられた恵みについて、多くの人々がわたしたちのために感謝をささげてくれるようになるのです。」（コリント二1：3～11）

このコリント第二の手紙の冒頭の部分は、日頃あまり皆さんはお読みにならないと思いますが、私はこの度これをずっとプリントにするのに一字一字拾って、本当



にある意味で感動した。

「はあ、そうなんだ、これなんだ」

と。人間の側のいろんな、誰が悪いからとか、私の信仰がどうだとか、そんなことではないということをごをここではつきりと言ってくれている。そして、こういうことがあるからこそ、苦しんでいる人たちのところへ出かけて行って、慰めることができる。またその方々によって自分が慰められるという、常に連帯感というものがそこに生まれているんですね。これが素晴らしいなと思いました。

### ●パウロの遭遇した苦難

それでは、現実にパウロはどんな苦難に遭ったのかというのを次にずっと拾いあげました。前の方の節で他の人と比べている。あの人たちはどうなんだと。他の人たちのことをコリントの人たちは非常に褒める。パウロはだめだ、あの人たちは凄いか。それに対してパウロは、

「いや、いや、彼らに絶対負けない。いろんな点で負けないよ」

と言って、いわば自己主張をしているところです。

パウロの遭遇した苦難の列挙（第11章22～27節）

「<sup>23</sup>……苦労したことはずっと多く、投獄されたこともずっと多く、鞭打たれたことは比較できないほど多く、死ぬような目に遭ったことも度々でした。

<sup>24</sup>ユダヤ人から四十に一つ足りない鞭を受けたことが五度。

共同訳では、次にも「鞭」と書いてある。これは文語訳でははつきり、「鞭」というのと「答」というのを分けてある。「答」というのは、先に三角の金属塊が付いていて、羊飼いが狼が来たときに追ひ払う武器です。それでやられますと、肉がえぐり取られるわけです。それは本当にきつと思います。それが三度だという。まあ、三十九回鞭で叩かれるのも痛いでしょうけれども、しかし、この答というのは肉体がえぐられるような傷を負いますから。

<sup>25</sup>鞭（答）で打たれたことが三度、石を投げつけられたことが一度、難船したことが三度。一昼夜海上に漂ったこともありました。<sup>26</sup>しばしば旅をし、川の難、盗賊の難、同胞からの難、異邦人からの難、町での難、荒れ野での難、海上の難、偽の兄弟たちからの難に遭い、<sup>27</sup>苦勞し、骨折って、しばしば眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食えずにおり、寒さに凍え、裸でいたこともありました。」（コリント二11・23～27）

これだけ並べられたら、もう我々は一切、文句を言えないですね。神の使徒であるパウロが、しかもキリストのためにあれだけ献身的に働いているパウロが、こんな酷い目にあわされている。パウロを召された時に、





「私はあなたを用いる。しかし、私の名前を運んでいく上でどんなに酷い目にあうか、どんな苦勞をするか、それはよくよく覚悟しておきなさい」

ということをキリストは言われた。

こういう凄惨な苦勞をしています。だから、皆さん、少々のがあつても、このパウロと比べたら大したことない。なにも自分の信仰が弱い、信仰が足りない、祈りが少ないのと、そんなことは関係ない。

「パウロを見てごらん、神さまは私を鍛えておられるんだ。私を本ものにしようと鍛えておられる」

と。先ほどのペテロ第一の手紙1章7節のところにありました。金が純金にされていく、純化されていく。我々の信仰というものが本当に純化されて、

「主さま、イエスさま。あなただけです。あなた以外にはもう何もすることはないたしません。あなただけです」

というふうな形で純化されていく。そのプロセスだというふうに考えていただきたいと思っています。しかし、必ず守られる。パウロは現に守られたんですから、それらの苦難の中で。

### ●苦難をも誇りとする

その次は、ローマ書です。こちらの方は明るい。

（2）ローマ人への手紙（ローマ書）から（第5章1～5節）

「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、<sup>2</sup>このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りとしています。<sup>3</sup>そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、<sup>4</sup>忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。<sup>5</sup>希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」（ロマ

5・1～5）

この5章の始めのところは素晴らしいところです。4章では、いろいろ信仰のことが書いてある。

「アブラハムは信仰によって神に喜ばれた」

とか、ダビデはどうだったとか、ずっと信仰のことが出てきて、そして5章では要するに、「人が神に受け入れられるのは信仰なのであって、自分の立派な行いとか、何か人間の側に根拠があるのではない。もっぱら神さまの愛、神の恵み、それをそのままに受けとる。それを信、信仰と言っている。神さまの恵みを恵みとしてそのまま受けとる。それによって神さまはご自分の御許へと我々を受け入れてくださ



る。それをキリストがちゃんと道を開いてくださった」

と。だから、このキリストのお蔭で神さまとの間にもはや敵対関係はない。それまではビクビクして、

「審かれるのではないか、審かれるのではないか。私は神さまの前に出られない罪深い人間です」

と、そういう恐れのお蔭がありますけれども、もうキリストがそれを全部取り去ってくださいました。だから、もう無条件に神さまの前に出て行くことができる。それはキリストのお蔭である。そういう恵みによって、

「神の栄光にあずかる希望を誇りとしています」

と。口語訳聖書では、「喜んでいます」と書いてあるけれども、共同訳では「誇り」と書いてある。私はドイツ語と英語の方を調べてみたら、やはり「誇り」という言葉を使っています。だから、「誇りとする」でいいのだと思います。まあ、パウロらしいですね、「苦難をも誇りとする」と。

「こんな酷い目にあつたんだよ。どうだ、わかったか」

と、なにかうれしそうに誇っているから、「喜びとしています」という訳にもなるんじゃないかね。苦難は——あるいは<sup>かんなん</sup>艱難でもいい——

「艱難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望につながっている」

「

という。

「少々の苦でへこたれないよ。もつと来い、もつと来い」

とやっているうちに、だんだん鍛えられて強められていく。そして最後には希望へとつながっていくという。なにか練り鍛えられるたんに強くされていつている。へこたれないで、むしろ上へ上へと向かって行っているような、そういう思いがいたします。そして、

「希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によつて、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」

という。

## ●パウロの終末観

それから、第8章のところ、これはパウロの終末観みたいなところですよ。

《将来の栄光（第8章18～30節）

「<sup>18</sup>現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないと思ひます。<sup>19</sup>被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。<sup>20</sup>被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持つ

ています。<sup>21</sup>つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。<sup>22</sup>被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。<sup>23</sup>被造物だけでなく、霊（御霊）

これは「聖霊」の「聖」という字が原語では付いてないから、しかし、明らかに内容的には聖霊を指しているので、ちよつと特別な符を付けてある。だから、私はそれを「御霊<sup>みたま</sup>」と読みます。口語訳聖書も文語訳聖書も「御霊」と大胆に訳しています。

霊（御霊）の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。<sup>24</sup>わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。<sup>25</sup>わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。

<sup>26</sup>同様に 霊（御霊）も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが 霊（御霊）自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。<sup>27</sup>人の心を見抜く方は、霊（御霊）の思いが何であるかを知っておられます。霊（御霊）は神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。<sup>28</sup>神を愛する者たち、つまり、ご計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということをし、わたしたちは知っています。<sup>29</sup>神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多く兄弟の中で長子とされるためです。<sup>30</sup>神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになったのです。」（ロマ8・18～30）

ずいぶん長いところですけれども、ここは非常に現代にぴったりのところではないかと思えます。いろいろな自然災害とか。いや本当に今は災害が多いですね。昔は考えられなかったようなことが次から次へと起こる。気候の変動もそうでしょう。昔はこんなに暑くはなかった。今は滅多にない暑さが連日続くような状況です。その他、いろいろ自然現象を見ておりまして、それはまさにここに書かれていますように、なにか「滅びへの隷属」というふうな事態、そういうことを思わざるをえないんです。

「<sup>20</sup>被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。<sup>21</sup>つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。<sup>22</sup>被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産





みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。」

### ●自然界の呻き

なにか、「自然界の呻き」と言いましょうか、そういうものをここで感じとる。よく、山が枯れたりします。枯れるべきでない山が枯れたりとか、そういった木々の姿を見てましても、なにか呻いているような感じを受けたりとか、いろいろこういう動植物の世界の中でも異変が起こっているようなことを時々見ますと、「呻いているんだなあ」という感じがします。

それから、人間もあの花粉症というので悩んでいますね、毎年のように花粉が飛んで昔はあんなのはなかったように思います。私たち子どものころは花粉症なんて聞いたこともなかった。ところが、この頃はもの凄いですね、花粉が。それはあんなに杉を植えるくらいかんのだと言われたらおしまいだけど、昔だつて杉はありました。どうしてこう、昔、我々の子どもの頃になかったいろんなことが今は次々と自然界において起こるのだろうか。そういうことを思いますと、なにか自然もやはり苦しんでいるんだなあと感じます。

森林の手入れをしないことによつて、雨が降るとドドーンと水が流れる。適当にちゃんと森林が、山が守られていたならば、雨は全部吸い込まれて、そんなに土石流が流れないはずです。ところが、山が荒れていますから、降った雨がドドーンと土砂と共に流れて、土石流というようなことでまた被害をもたらすとか。山も苦しんでいるわけです。山林を維持するだけのお金もないのか、人もいないのか、わかりませんが、林業にせよ、そういう山をどうするかということも非常になにか問題が多いような気がします。山の動物たちも食べ物がないから地上に現れて来ましょ。地上の作物がまた荒らされましょ。昔は山の中でちゃんと暮らしていたんでしょね。現代は、自然界自体がなにかリズムが狂っていると、そういう思いがいたします。だから、パウロさんもぎつと今いらつしやつても、同じことを仰るかもわかりません。

「自然界も苦しんでいる。呻いている。早く人間たちが神の子になつて変貌しないと、自然は救われないよ」と、つまり、

「人間が変貌するならば、自然界も救われる」と、こういうふうにパウロは考えたんです。

### ●滅びへの隷属から解放されて回復された姿

これは決してパウロだけのひとり相撲<sup>ずもう</sup>ではありません。イザヤ書11章にそういう預言があるんです。



「<sup>1</sup>エッサイの株から一つの芽が出、その根から一つの若枝が生えて実を結び、<sup>2</sup>その上に主の霊がとどまる。これは知恵と悟りの霊、深慮と才能の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。<sup>3</sup>彼は主を恐れることを樂しみとし、その目の見るところによって、さばきをなさず、その耳の聞くところによって、定めをなさず、<sup>4</sup>正義をもって貧しい者をさばき、公平をもって国のうちの柔和な者のために定めをなし、その口のむちをもって国を撃ち、そのくちびるの息をもって悪しき者を殺す。<sup>5</sup>正義はその腰の帯となり、忠信はその身の帯となる。<sup>6</sup>おおかみは小羊と共にやどり、ひょうは子やぎと共に伏し、子牛、若じし、肥えたる家畜は共にいて、小さいわらべに導かれ、<sup>7</sup>雌牛と熊とは食い物を共にし、牛の子と熊の子と共に伏し、ししは牛のようにわらを食い、<sup>8</sup>乳のみ子は毒蛇のほらに戯れ、<sup>たわむ</sup>乳離れの子は手をまむしの穴に入れる。<sup>9</sup>彼らはわが聖なる山のどこにおいても、そこなうことなく、やぶることがない。水が海をおおっているように、主を知る知識が地に満ちるからである。」（イザヤ11・1～9）

即ち、神さまの知識、神さまを知る、天下のすべての人が本当に神さまの御言に満たされ、生まれ変わった、そういう世界では、動物たちまでも生まれ変わってしまっている。狼と小羊が一緒に暮らすとか、乳飲み子が毒蛇の穴に手を入れても、まむしの穴に手を入れても、どこにおいてもそこなわれることがないと。即ち、弱肉強食とか、そういう世界がもう消えうせて、本当に神の国ではすべてが平和であるという、そういうことをここで歌っている。これは預言です。だから、この預言が成就するのは、パウロによれば、今の滅びへの隷属から解放されて、本当の回復された姿がこのイザヤ書11章で歌われているのではないかなという思いがいたします。

「<sup>21</sup>つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。<sup>22</sup>被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。」

と。要するに、

「人間どもが新しくされなければ自然界も救われない。人間界が新しくなれば自然界もまた救われる」

という、そういう見方です。

ですから、パウロは決して、自然界を征服するとか、自然界と戦うとか、そんなことは言っていない。よく、

「西欧の自然に対する対し方は、自然を征服するという、なにか自然と敵対的な関係である」

というふうに知識人は仰いますけれども、しかし、聖書はそんなことは言っていない。聖書



は常に自然というものを大切にしています。その点では日本人と似ているわけです。共存共栄という、そういう関係です。

### ●向こうに輝く世界があるという希望

そしてまた、被造物だけではない。

「我々自身だって呻いているではないか」

と。確かに御霊をいただいたことはうれしい。けれども、現実の身体というのは死に定められた身体ですから、いずれ死ぬわけです。病気にもなります。いろいろ傷つきもあります。だから、そういうものが克服された世界、それが完全に贖われるという、

「本当の霊体をいただく、復活体をいただく、それを待ち望んでいる」

ということのパウロは言っているわけです。

被造物だけではなくて、御霊というものをいただいた私たちも、

「<sup>23</sup>御霊の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。」

と。「待ち望む」ということは将来のことですから、まだ現には起こっていない。しかし、それは確実だというふうにしつかりと霊の目でとらえているということなのです。

<sup>25</sup>わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。

忍耐というものが必要であると。

<sup>26</sup>同様に、《霊》（御霊）も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、《霊》（御霊）自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。

御霊ご自身が私たちのために祈って執り成してくださると。

<sup>27</sup>人の心を見抜く方は、《霊》（御霊）の思いが何であるかを知っておられます。

《霊》（御霊）は神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。

そしてまた、御霊の思いをずっと天界にいらつしやる神さまはご存じであると。

<sup>28</sup>神を愛する者たち、つまり、ご計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」（ロマ

8・23〜28）

つまり、神の子とされた私たちは、何が起こっても、これで終りとか、万事休すとか、ということはないと。常にそれはプラスに働く。一切が最終的には勝利に終るといふ、この確信が与えられる。見えるところはどうかであっても、そういうものに振り回されないで、必ず神の御言は成っていくと、キリストが保証してくださる。





「いつ死んだって、キリストがすぐに迎えて、<sup>いだ</sup>懷き抱きしめてくださる。そして、キリストにあつて先に向こうに行つた人たちがみな私たちを迎えてくれると。そういう向こうに輝く世界がある」

ということが、今のこの世で生きている私たちをどんなに強く支えているかということですよ。この思いがもう晩年になればなるほど強くなると思うんです。

### ●懷深く幅広く清濁合わせ飲む福音

二十代の青春時代にそんなことを言われても、

「私にはまだあと六十年、八十年もありますから」

と言って、ピンと来ないでしょうよ、きつと。

「しばらくは、自分の力でやらしてよ。若い時から、『神さま、神さま』なんて、そんな情けないことを言うのは勘弁してよ」

と、きつと思うと思う。また、若者はそのくらいのでファイブがあつてもいいと思うけれども、しかしながら、一方では神さまの方から語りかけがあるから、

「傷ついたら寄つておいで、傷ついたらいつでも飛び込んでおいで、それまではやれるだけやってごらん」

と、そうやって解放してあげたらいいのではないのでしょうか。それがあまりにもクリスチャン・ファミリーは小さい時からキリスト教の信仰で育て上げようとしたら、これは失敗しますよ。やはり、人間は自由のびのびと生きて、そして、

「しかし、待っているからね。傷ついたら、いつでも帰つておいで」

と言つてやるのが、私は本当の親だと思ふ。しかし、クリスチャンの信仰深い家庭では、子どもさんがうまくいかないことが多い。引きこもりになってみたりとか、仲間との間がうまくいかなかったり、学校で除け者になつてみたりとか。イエス・キリストの話をすると、みんなから揶揄<sup>やゆ</sup>されて冷やかされる。だから、閉じこもるとか。ヒルティも言っているんです、

「小さい子どもの頃から宗教教育をしない方がいい。人間としてあるべき姿は何かということをしつかり大人が見せてやれ。大人の姿を見て、子どもがあこがれるような、そんな大人であな自身がありなさい。そうしたら、子どもは自然にちゃんと行くべきところに行くんだから」

というようなことをヒルティは『幸福論』の中で言っているところがあります。日本はまだキリスト教が浅いですから。何といつても明治以降でしょ。私はクリスチャン・ファミリーの初代です。とにかく、あまりにもクリスチャン・ファミリーで、

「キリスト、キリスト。信仰、信仰。あれはいけません、これはいけません。世の人はこう言うけれども、あなたはこうありなさい」



とか、そんなふうな形で、あまりにもこの世と自分たちが生きる世界が違いすぎる、その中だけで純化して育て上げようとしたら、子どもさんはつぶれます。やはり、雑菌の中で育つのがいい。つまり、純粹培養では危ないということです。世の中の荒波の中でもまれて、その中でいろんなものを学びながら、しかし、どつしりと構えて、

「どんなことがあったって、お父ちゃんはある味の味方よ。お母ちゃんも味方よ」

と言つて、ふところ豊かに子どもを見守つてやるといふ、それがよいのではないかと――脱線しましたが――私はそう思います。私は、正直、日本全体がこのキリストの御意<sup>みこころ</sup>になかなうような姿になつて欲しい。それが成就するためには、ふところが深く、幅が広くないといけない。狭い狭いキリスト教では人はついて行かないと思う。だから、非常におおらかで、

「愛は寛容にして慈悲あり」

と言いますね。

「すべてを信じ、すべてを忍び、すべてを担い、すべてに耐える」

とか、そういう姿でふところ深く幅広く、また時には甘いも酸<sup>す</sup>いもかみ分け、全部、清濁合わせ飲むぐらいの豊かさをもつて、人々を受け入れ、子どもたちに接するといふ、そういうのがずっと社会に浸透していけば、おのずと自然にかキリストの仰ることがしみ込んでいくのではなからうか、などと私は思っているんです。

つまり、私はそれだけ日本にこの福音が根付いてほしい。本当のキリストの心を心とした民族であつてほしい。それは決して天皇制とか神社神道とか、そういうものとは矛盾しません、そう言いたい。天皇制にせよ、神社神道にせよ、その他仏教にせよ、あつていではありませんか、みんな。この世のことなんです。それを全部、包み込んで、そして、本当に向こうの世界で、この地球全地を、宇宙を懷いていらつしやるような、そういう神の懷、そこにみんな抱かれていくといふ、おおらかな、そういう信仰でありたいといふのが私の願いです。

### ●キリストの愛の勝利

その次に、参考としてコリント人への第二の手紙をあげました。

《参考》コリント人への第二の手紙（第4章16～18節）

「<sup>16</sup>だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます。

<sup>17</sup>わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。<sup>18</sup>わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」（コリント二4・16～18）



同じようなことですね。それから今度は、ローマ人への手紙の8章の最後のところです。

キリストの愛の勝利（ローマ人への手紙第8章31～39節）

「<sup>31</sup>では、これらのことについて何と言ったらいだろうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。<sup>32</sup>わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。<sup>33</sup>だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。<sup>34</sup>だれがわたしたちを罪に定めることができましょう。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。<sup>35</sup>だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。<sup>36</sup>そして、旧約の引用ですが、

パウロがずつと経験したこれらのことです。「艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か」と。そして、旧約の引用ですが、

<sup>36</sup>『わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ、屠られる羊のように見られている』

これは迫害の中です。

と書いてあるとおりです。しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方

キリストです。

によって輝かしい勝利を収めています。<sup>38</sup>わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、<sup>39</sup>高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」（ロマ8・31～39）

これは本当に素晴らしいところですよ。キリストが私たちの味方、キリストが私たちのためにすべて執り成しをしてくださる、守ってください。だから、誰も私たちをやっつけることができないんだということを始めに言いました。そして、

「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができるでしょうか」

と。キリストの愛から引き離すことは絶対できない。なぜなら、キリストは私たちのために自分の命を差し出してまで私たちを救いあげてくださったお方です。そのお方が一人ひとりを守っておられる。これは凄いことですよ。地上におられたキリストはそこまでできませんよ。地上におられたキリストはやはり肉体の限定の中におられますから、一人の人に手を置いておるならば、別の人に同時に手を置くことはできません。千手観音ではあり



ませんのでね（笑）。けれども、霊なるキリスト、これはいつも申しますように、太陽光線のように地上のあらゆる人のところへ同質的に——薄められないんです、同質的に——百%、一人ひとりのところに宿られる。そして、地上におられたキリスト以上のことをなさってください。

### ●十字架の捨身の愛

「そのために私は十字架にかかった。そして天に昇った。そして今、降<sup>くだ</sup>ってきた。あなた方と一緒に居<sup>お</sup>りたいのだ」

と、ヨハネ伝にありました。そのように、あのキリストという方の姿を見えますと、本当になんとか申し訳ない。

「こんな者のためにそこまで苦勞してくださいませんか。そこまで苦勞してくださいなくてもよろしいのですのに」

と言いたいくらいにね。本当に自分のために何も求めておられない。ひとえに、

「あなた方一人ひとりを本当の神の子にするために。神の子どもとして喜びにあふれて、生命にあふれて、生きてくれるように。しかも、地上の命ではない。それを突破して永遠の生命で輝くように、そのために私は自分を神さまに献げます」

と。しかも、

「それは神さまの御意<sup>みこころ</sup>だから。自分の思いではなくて神の御意だから自分を献げる」

という、この捨身の愛。簡単に捨身の愛と言いますが、本当にキリストのこの十字架の愛というのは凄いですね。それを本当に目の前にしたらもう何も言えない。本気でキリストのそういうご愛というものに向き合っていたきたい。そうしたら、何も不満は出てきませんよ。

「人がどうであろうが、人が自分をどう思うが、また、自分がどんなにひねくれたやつであろうが、そんなことはもう関係ないよ」

と、キリストは仰るんです。

「お前が立派だから救ったのではない。お前はお前であるがゆえに救ったんだ。あるがままのお前をそのまま受け入れて、そして救い上げた」

と。神さまの前には清くないと立てませんから、全部、ご自身の血潮で、

「あなた方はもう清めてある。罪は全部洗われている」

と。血潮が清めるわけですね。黙示録に出てくる。

「あの白い衣を着た人たちは誰ですか。あの人たちはキリストの血潮で衣を洗った人たちである。そして、『ホサナ、ホサナ』と呼びながら天界を行進している」

というような姿が黙示録に出てきます。

そのように、キリストというお方は、本当に捨身の愛というかな——慈悲深い方はたく



さんいらつしやると思うんですよ、この世の中に。お釈迦さんも慈悲深かつたでしょうけれども――キリストみたいなきつう苦勞をなさつた方はいません。ご自分の命を献げて、しかも、敵対する者たちのために、過去・現在・未来永劫に全人類のそういう運命を背負つた。御意に従つて背負われた。

これはもう信するしかないんです。そんなものを、

「客観的に証明しろ。何でキリストの十字架が過去・現在・未来の人類の罪をそんなに贖う力があるのか科学的に証明しろ」

と言つたつて、

「それは私はできません。でも、私はそのキリストのご愛をそのまま受け入れて、『主よ』と呼びたてまつるだけ」

と言います。だから、キリスト者とは何かというと、十字架の主のご愛を受けて、「主よ」と、「主さま。ありがとうございます。あなたに本当に抱き取られて、本当にありがとうございます。うございます。あなたと一つにおらしてください、永遠に」

という、キリストのところに嫁入りしたようなもんですね。そうでしょ。婚姻のことが黙示録に出てきます。キリストという夫、それに信者はみな花嫁だという比喻で言われていますように、その夫たる花婿は花嫁のために命を差し出したわけですから。それに感動して、

「一緒におらしてください」

「いや、私こそあなたと一緒にいたいんだよ」

と。そういう一体感です。それが私を支えていますし、また、お一人おひとりを支えているのではないか。そういうことをパウロはこのローマ書の中で宣言してくれているんだと思います。

### ●キリストがすべて

「神が私たちの味方であるなら、キリストを通して神さまが我々の味方であるなら、いったい誰が敵対できるのか。人々が自分たちのことをどんなに悪しざまに言おうと、キリストが全部、弁護してくださるから。神の右に坐つて私たちのために執り成していただく。誰がキリストの愛から私たちを切り離すことができるか。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。何がきたつて大丈夫だ。これらすべてのことにおいて、私たちは私たちを愛してくださる方イエス・キリストによって輝かしい勝利をおさめている。」

と。キリストは、

「あなた方は地上ではいろんな悩みがある。しかし、勇気を出しなさい。私は既に世に勝っている」



ということをやハネ伝で仰いました。パウロは現にそうやって勝っていききました。だから、ここにも最終的に結論として、

「<sup>37</sup>しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。<sup>38</sup>わたしは確信しています。死も、命も、

地上の生き死に、これが「死も、命も」です。それから霊的な存在、天使とか、何か支配者とか、

天使も、支配するものも、現在のもものも、未来のもものも、力あるものも、<sup>39</sup>高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」（ロマ8・37～39）

と。以上でわかりますように、これはいつも言っていることですけれども、私たちは、何か自分たちの信仰が強いからとか、自分たちはこういうものだからとか、自分たちの側に根拠があるのではないということです。

一方的な神の愛、それはキリストによって示された神の愛です。キリストは神さまの御子ですから。見えない神さまを見る形で表したのがイエスというお方です。そのお方の愛、それがあなたを捕まえて引つ張って行かれる。引つ張って行かれるところが天国なんですから、生命の世界なんですから、ありがたい。私の側からは、

「ありがとうございます。全部お受けいたします」

と。そういう感じであつて、こちら側には何もありません。よく、教会では、

「強い信仰を持ちなさい」

とか、何かいろいろなことを仰るんですよ。

「いや、私は強い信仰なんてありません」

「信仰が足りませんね。もっと信仰を強くしなさい」

とか、いろいろ言われると、重荷になるんです。でも、私はそうは受けとらない。

「いえ、全部、キリストです。キリストがすべてです」

「それはあなたの勝手な信仰でしょ」

「はい、まことに身勝手な信仰であります」

と、開き直っています。

### ●試練をひたすら喜びとせよ

はい、それでは次にヤコブの手紙。これで終りになります。

《2 ヤコブの手紙から（第1章2～4、12節）

「<sup>2</sup>わたしの兄弟たち、いろいろな試練に出会うときは、この上ない喜びと思





いなさい。

文語では、「試練をひたすら喜びとせよ」と書いてあります。

3 信仰が試されることで忍耐が生じると、あなたがたは知っています。4 あくまでも忍耐しなさい。そうすれば、完全に申し分なく、何一つ欠けたところのない人になります。」（ヤコブ1：2～4）

忍耐を通して神さまは鍛え上げてくださるのだから、

「試練が来たら、ああ、鍛えられるんだ。喜べ、喜べと、こういうふうに思いなさい」と。それから、

「<sup>12</sup> 試練を耐え忍ぶ人は幸いです。その人は適格者と認められ、

「適格者」なんていう言葉はなんだかあまりピンときませんけれども、神さまにふさわしい者ということ、

神を愛する人々に約束された命の冠<sup>かんむり</sup>をいただくからです。」（ヤコブ1：12）

と。こうして見てきますと、何か新約聖書のパウロ、ペテロ、ヨハネ、ヤコブといったところにも、常に「試練」とか、「苦難」とか、「艱難」とか、そんなものが羅列されているんです。しかも、

「その中で忍耐しなさい」

と、また「忍耐」ということが言われている。

忍耐なんて現代人が最も嫌なものです。現代人は本当に忍耐することを忘れましたね。我々戦中派は、もう「忍耐、忍耐、忍耐」で、

「欲しがりません、勝つまでは」

なんてやって、とうとう負けてしまいましたけれども。忍耐の連続でしたよ。冷房もありませんし、暖房もありませんし、もうすべてに忍耐ですよ。ひもじいですしね。忍耐、忍耐、忍耐。現代の人はあまり忍耐ができなくなりましたけれども、聖書は本当に「忍耐」という言葉がずらつと出てくる。しかも、どんな時にかというのと、

「試練に見舞われる時、うれしくないものが次々と襲つてくるときにこそ喜びなさい」と、そんなふうに言ってますので、

「ああ、そんなものなのか。そしたら、もう文句言うことないな」

と。そういう意味で、見方が変わりますでしょ。我々は当然、嫌なことは避けたいですよ。忍耐なんてしたくない。できれば、平穩無事でのんびりと左うちわで過ごしたいと思えますけれども、神さまはそうはさせてくださらない。だから、

「鍛えられて、鍛えられて、磨かれていくんだ」

という。スポーツの世界はそうですから。あの長嶋選手なんていうのは、昔、千本ノックですよ、暗くなるまでやられた。身体が反応して、ボールがグラブに入っている。もう考えない。自然に反応して、それでやっている。だから、素晴らしいんです。今でも、そう

いうトレーニングもあります。即ち、夢中で、思考力を離れて反射的に動いたプレーといふかな、反射的につまり無念無想の境地といふかな、なにか一切の判断を超越したようなところでプレーしているときに本当のプレーができるということらしい。スポーツの世界というのはそうでしょ。ランニングとか、水泳でも、一秒の何分の一を争っているから。そういうところであの人たちは鍛え上げている。我々は、この現実生活というのは、神さまのそういうトレーニングの中で鍛えられて、そして迎えられるところは金メダルですよ。金メダルを皆さんはいただく、冠をいただくわけです。パウロが言いました、

「義の冠が待っている。祭壇に私の血を注ぐことがあっても、私は喜ばう。今

や義の冠が私を待ってくれている」（ピリピ書2・17、テモテ後書4・6～8）

と。スポーツでいうと月桂冠ですね。優勝者には月桂冠が授けられる。そんなふうに、私をよくスポーツの例を出しますけれども、やはり、人間は鍛えられて、磨かれて、そして本当のものになっていく。

「ただ信仰があればそれでいい」

というような甘っちょろい世界ではないということがよくわかります。ですから、どうぞ皆さん、何が来ても、びくともしない。それはキリストが守ってくださいっているから。キリストのご愛は一切に勝って強いと。

「愛は一切に勝つ」

という、その愛はキリストの愛です。それは一切に勝って強い。そういうことをしっかりと心に懷いていただいて、ご自分の人生を築きあげ、また後に続く者たちを励ましていただきたいと、そういう思いです。それでは、今日はこれで終ることといたします。

### ●祈り

では、お祈りいたします。

主さま。暑さの厳しい日々が続きます。また今、日本はとても厳しい現実の中にあります。しかしまた、そういう中でこそ私たちはいよいよ本ものを求め、何がきても奪われない永遠の生命、あなたの御国、見えるものではなくて見えない本当の生命の世界を恋い慕います。どうぞ、ここに集われたお一人おひとりが、この御言が本当に生命であること、

「わが言は霊なり、生命なり」

と仰った、また、

「私は道であり、真理であり、生命である」

と仰いました、このそれぞれの方の道であり、まことであり、生命でありたもうあなたと一つとなつて、これからの日々を歩んで行くことができますように。周りの人たちと手を取り合つて進むことができますように。また、苦しんでおられる方の苦しみを担い、慰めを与え、そして、共に聖名を讃えることができますように、導いてください。



特に、病んでおられる方のそばにあなたがご臨在しまして、どうぞ、力を与え、ゆるされるならば癒しを与え、そして、希望に満たして歩いてくださるように、希<sup>こいねが</sup>いたてまつります。特に、震災に遭われた方々をどうぞ、深く顧みてくださるように、希いたてまつります。

この感謝と讃美と祈りをここに集われたお一人おひとりの胸のうちなる祈りと共に、今、主イエス・キリストの尊き聖名を通して父なる神の御前にお献げいたします。アーメン！

（小冊子『試練の中での希望』2011年10月15日発行より転載）

